

# すべての人に「ありがとう」を

宮城県石巻市 震災の日々を生きる中学生の作文から



震災——子どもたちはどう受け止め、どう感じてきたのでしょうか。  
三分の一以上の生徒が家屋を失った宮城県石巻市立北上中学校二年生の佐々木真智子さんの作文を紹介します。

▲中学校から、津波が遡った北上川を見下ろす。家は跡形もない。5月まで避難所で暮らした。▼配給物資のおやつを配る佐々木さん(中央)。



## 感謝の気持ちを伝えたい

宮城県石巻市立北上中学校二年生  
佐々木真智子

「ありがとう」私は今一番、この言葉を伝えたい。いつもそばで励ましてくれた友だちに。悩んでいた私に声をかけてくれた先生に。そして、家族に。改めてこの言葉を伝えたいと思ったのは、あの震災があったからだ。

三人でひとつのおにぎり、  
六人で一枚のタオルケット

二〇一一年三月十一日、東日本大震災発生。卒業式の準備で体育館にいた私たちは、先生の指示ですぐに校庭に

避難した。「大津波警報が出ているので、高台に避難して下さい」という放送が聞こえて来た。雪が降って寒く、揺れがおさまると体育館に戻った。何が起きているかよく分からないまま、その日私たちは、避難して来た地域のの人たちと共に、体育館で一夜を過ごした。

食べ物も着るものもほとんどない。お年寄りを優先し、私たちは三人でひとつの小さなおにぎりを食べ、六人で一枚のタオルケットを使った。三人がタオルケットをかけて横になっっている間、あとの三人はパイプ椅子に座り、三〇分くらいで交代する。暖房も壊れ、小さな石油ストーブだけ。

寒くて、おなかも空いたが、避難して来た人の話から、一階が浸水した家の二階に取り残されている人がいることを知り、「きつともっと大変な思いをしている人がいる。私はまだ幸せだ」、そう自分に言い聞かせた。それ

でも、避難して来た人の数や様子を見るにつれて、「家はどうなっているのだろう?」「家族のみんなは、どこでどうしているのだろう?」と不安も大きくなっていった。はじめは実感が湧かず、友だちとおしゃべりしていたが、だんだん口数が少なくなった。

その時に、お互いを励まし合ったクラスの友だち。きつと自分も不安だつたらうに、「大丈夫。みんな生きていくんだから」と、優しく声をかけてくれた。海のすぐ前に住む友だちが、「うちはだめだと思うけど、みんな大丈夫だよ」と言ってくれた。一番辛く苦しかったあの夜を、一緒に乗り越えてくれた友だちがいた。

一週間後、ようやく家族が揃った

翌日のお昼過ぎ、学校に近い職場で津波に遭い、助け出されたという母が、私を迎えに来てくれた。泣きなが



石巻市立北上中学校

北上川を見下ろす高台に建つ。全校生徒 94 人。翌日の卒業式の練習が終わり、下校しようとしていたところに地震発生。津波は北上川を 10 キロ以上も遡る勢いで押し寄せたが、高台にあったため被害は免れた。すでにスクールバスで帰宅途中だった 3 年生が、運転手の機転で学校に引き返し、難を逃れ生徒は全員無事だった。その晩、生徒と教職員は、避難して来た地域の人々と共に体育館で夜を明かした。

4 人の生徒が片親を亡くし、2 人が兄弟を失った。38 人の家屋が全壊。20 人が仮設住宅に暮らす。校舎は地震の揺れで大きく損壊し、補修工事が進んでいる。隣接して仮設住宅団地ができた (左奥)。



同級生と給食を食べる佐々木さん

てくれてありがとう。ずっと側にいてくれてありがとう。流した涙から、お母さんの優しさが伝わってきました。お父さん、私たちのことを考えてくれてありがとう。道路がまだ復旧しきれていない中、仕事で夜どんなにおそくなっても帰って来て、家族と過ごす時間を大切にしてくれてありがとう。お父さんがいてくれたから、私は安心してきました。おばあさん、「大丈夫だ！」と温かい言葉で励ましてくれてありがとう。笑顔でいてくれてありがとう。私もつられて笑顔でいることができました。風馬、みんなに元気をくれてありがとう。私はお姉ちゃんなのに、いつも元気をくれたのは弟の風馬でした。私の大切な家族、生きていてくれてありがとう。

先生へ。心配してくれてありがとう。ございました。勉強も、日々の生活も、先生が話を聞いてくれたから、私は不安を吹き飛ばすことができました。

ら私を抱きしめて、名前を呼んでくれた。私は母と一緒に、一夜を過ごした学校を出て、母がいる近くの避難所へ移った。

その時はじめて見た何もない外の景色に、私は言葉が出なかった。涙がこぼれそうになった。まるで私の知らない町のようなだった。怖かった。なんだか夢を見ているようだった。長い夢を見ているようで、早くこの夢が覚めればいいと思った。でも、夢なんかじゃなかった。見慣れた故郷がなくなっただけは、決して夢なんかじゃない。そう気づくまで、ずいぶん時間が経っていた気がする。

夢じゃないと気づいた時、どうしようもなく悲しくなつて、泣きそうになった。家の近くの避難所にいた祖母と弟には三日後、仕事先にいて帰って来るのが困難だった父には一週間後にやつと会えた。家族全員が無事で、再開することができた時、あらためて家

族の大切さを実感した。あの大きな震災があつても、誰ひとり欠けることになかった私の家族。私はとても幸せなのだと感じた。家族はいつも、私と一緒にいてくれた。

避難所での慣れない集団生活

家族揃つての避難所生活がようやく落ち着いた頃、先生が来て、勉強を教えて下さった。避難所にいる私たちのことを、「大丈夫か？」といつも心配し、助けて下さった。

住み慣れた家にはもう住めない。避難所での生活は家と同じようにはいかなかった。人見知りの私にとつては、今まで一緒にいたことのない人たちの集団生活の中で、ひとりになりたい時にひとりになれる時間が持てなかったことなど、不自由だと感じることもたくさんあった。それでも、私が明るく前を向いていられたのは、きっとみ

んなが支えてくれたからだろう。笑い話で盛り上げてくれたり、不安で泣きそうになる夜、側にいてくれたり……。感謝してもしきれないほどに、私はまわりの人たちに支えられてきた。その全ての人たちに、今何よりも感謝の気持ちを伝えたい。

みんながいてくれてよかった

友達へ。あの日の夜を一緒に過ごしてくれてありがとう。家族のことを考えて思わず泣きそうになった私に、「大丈夫」と声をかけてくれてありがとう。自分も辛いはずなのに、笑つてくれてありがとう。私はみんなに励まされ、笑顔になれた。たくさんの勇気をもたらした。みんながいてくれて本当によかった。いつか私も、みんなに笑顔や勇気を分けられる人になりたい。本当にありがとう。

家族へ。おかあさん、私を迎えに来

新聞記事のコピーが壁一面に貼られた校長室。同校や同地区で行われた支援活動や取り組みを紹介した記事と共に、畠山先生の目に留まった言葉や、被災地の人々が綴った詩の切り抜きがありました。

「震災後の日々を通して実感したのは、言葉の力でした。モノと違って、直接何かの役に立つわけではない。でも、過酷な体験の中で、詩人でもない普通の人たちがほとぼしるように発した言葉や詩に、共感し、慰められ、勇気づけられました。

子どもたちの被災の程度はさまざまですが、ほとんど被害のなかった地区もあ

## 言葉という表現手段を支えにして

石巻市立北上中学校校長  
畠山卓也先生に聞く



校長の畠山卓也先生、右は教頭の及川てい子先生、左は作文を指導した担任の佐々木友里恵先生

れば、家屋を失い肉親を亡くした生徒もいる。心のあり様もひとりひとり違いますが、誰かの言葉に触発されて、子ども自身が自分の言葉で、体験や思いや感情を表現できるようにになれば、誰でも辛いことは思い出したくない。でもやがて、心にしまい込まれた記憶や感情を再生できるような時期が来る。その時、ありのままを表現できる

言葉を持つていることは大きな力になる。涙を流しながらでも、振り返ることを通して、前に向いていけるんです」と畠山先生。

「震災は大変辛い体験ではありましたが、子どもたちはその地点に留まってはいいですね。その子なりに受け止めて前を向かっていることに、むしろ私たちおとなが、励まされ救われています」と、教頭の及川てい子先生は生徒たちの変化を感じています。

「『今までは自分のことしか考えていなかったし、楽しければいいと思っていただけで、まわりの人の力になりたいたと思うようになった』と話す子、『人生なんて考えたこともなかったけれど、生きられた自分を大切にしないと』と語ってくれた生徒もいました」。

自分の心を見つめ、未来に向かってゆく時、言葉という表現手段が、その大きな支えになるに違いありません。

(編集部・小山厚子記)

た。本当にありがとうございました。失われた故郷、多くの尊い命。十年先の未来が見えず、傷つき、苦しむ人が数多くいる中で、私がこれからできることはどんなことだろうか。それは、ほんの小さいことかもしれない。いつも笑顔を決やさない、周りの人に感謝する、苦しんでいる人の話を聞く……。

私にはそうであったように、ほんの小さなきつかけで笑顔になれる人もきつといるはずだ。まず周りの人を大切にすることから始め、地域全体を大切に、新たな故郷を私たちの手で築いていきたいです。

## 「ありがとう」を言葉に

あの震災からもう九カ月が経った。友達や先生、そして家族ばかりでなく、県外、海外から、たくさんの方が私を支えてくれている。今の私は、と

考えると、頭ではいろいろ思っているも、具体的に何をどうしたらいいのかはわからず、正直なところ、支援して下さっている人たち、そして周りの人たちに甘えて、ただ毎日を過ごしてしまっているようにも思う。

もちろん、私を支えてくれた人たちに感謝を伝えたい気持ちは変わらないう。けれど、面と向かって感謝の気持ちを伝えるのは何だか照れくさいような気がして、なかなか言うことができていない。

これからは私を支えてくれた人たちに感謝を伝えるために、「ありがとう」というそのひと言を言葉にしていきたい。そしていつか、そのすべての人にある「ありがとう」の言葉を伝えられたらと思う。

\*夏休みの課題として書いた作文に、加筆していただきました。



佐々木さん家族。仮設住宅で暮らしている。